

粕谷和夫の観察日記。八王子・川町谷戸で野鳥の定期カウントをしていると休耕田に生えた小木の枝にオオカマキリの卵鞘（らんしょう）が目にとまりました。高さが2M以上あり、スポンジ状の袋は、外敵や寒さ、乾燥から卵を守るため、この中には小さい卵が200個ほども詰まっています。小木の「冬芽」も膨らみ始めています。

紅葉台

新聞

第175号

2025年

3月29日

発行人：関谷 孝



初沢山一周探鳥会 紅葉台シニアクラブ

2月23日（日）天皇誕生日（65歳）。朝から寒さが身に沁みる日でした。それでも日中は日差しが暖かく、大雪の北陸や東北地方を思うと青空の見える天候はすごしやすいです。【写真左から中山・中村・角田】



さて、毎年紅葉台シニアクラブでは、地域の探鳥会をしています。2015年から始めて9回目（去年は雨のため中止）。

参加者は大人11名。子供2名。八王子市環境学習室（エコひろば）でボランティアをしている中山さんは、参加者のために双眼鏡と鳥の絵本を持ってきてくれました。また、八王子・日野カワセミ会が作った「高尾・浅川野鳥図鑑」も宣伝しました。八王子の本屋さんで990円販売しています。アマゾンでも購入できますので1冊ポケットに入れてお散歩のときに役立ててください。



初めに、この探鳥会の企画をした角田さんから野鳥の鳴き声の話がありました。グズリ・囀り・地鳴き。これから春になるとつがいを見付けるためさえずりの美しい鳴き声が聞こえます。日ごろの鳴き声との違いを聞き分けるといいですね。最近話題になっているシジュウカラの鳴き声には人と同じように鳴き声が仲間に危険を知らせたりする言葉のようにになっているとの興味深い研究があります。（「僕には鳥の言葉がわかる」鈴木俊貴著・動物言語学者）最後に、双眼鏡の使い方、ピントの合わせ方の説明もありました。

さて、いよいよ出発。最近春めいてきたので野鳥の鳴き声が良く聞こえます。ジョウビタキがいつも同じ場所に来ます。縄張り意識の強い鳥なのでいつも同じ場所に現れます。ジョウビタキの雌がチツツと独特の鳴き声であられました。人に慣れたのかすぐ近くに来ます。山道にはあまり野鳥はいませんが木々が枯れて開けたところにはコゲラやヒヨドリがいました。



みころも堂の池は氷が張ってました。カルガモ5羽がいました。また小さな岩の上にカワセミがいました。まだ体が小さいので昨年生まれたのかもしれませんが。この池にカワセミが戻ってきたのは嬉しいことです。昨日はダイサギとカワウがいたとの情報もありました。枯れ葉の所にはなんとシロハラがいました。壁際を歩いていたのでじっくり観察できました。初めて見る人も多く感動！です。この辺りはナラ枯れが進みたくさんの大木が

伐採されていました。かつてアオゲラの巣があったのですが、木を切ってしまったので鳥の姿も減ってしまっています。高尾天神社には受験の神様で有名な菅原道真公の大きな像があります。梅の花がもう少しで咲きそうでした。ここから八王子の町が見渡せます。神社の長い階段の脇にある大きなクヌギの木がまさに伐採中でした。



浅川中学校沿いの初沢川は最近工事をして川底がコンクリートになってしまいました。そのせいか生き物がいません。土手の桜や梅の木も伐採され枯れ草が覆っています。そんな中にシジュウカラが集団でさえずっていました。しばらくみんなで観察。凍った川の上にはキセキレイやハクセキレイ、セグロセキレイがいました。キセキレイは黄色い羽根が綺麗です。この川にキセキレイが戻ってきたのは嬉しいことです。残念なことにホオジロがいたところに今年もいませんでした。もうすぐ春になるのでウグイスの笛鳴きが聞こえました。メジロが梅の木に来て花の蜜を吸っています。高乗寺で休憩をして長いさくら階段を上ります。ここは高齢者には難所です。坂を上って初音台公園で鳥合わせをしました。全部で16種。ベストは、シロハラ・キセキレイ・シジュウカラ。参加した子供たちも「学校でみんなに野鳥のことを話そう」と言っていました。発見したことを人に伝えるともっと理解が進みますね。「今回初めて参加して野鳥が見られて楽しかった」「みんなで探すと自分では見つけられない鳥も発見できて楽しかった」との感想が出ました。地域の探鳥会はいつもの散歩道にいる野鳥を見付ける楽しさがあります。それにいつの間にか変わっていく自然環境に気づきます。思いがけないところでの野鳥との出会いに感動します。野鳥のことを知ることで生き物への関心が深まることでしょう。鳥と人が共存する自然環境にも目が向くことでしょう。自分たちの住む町がいつまでも野鳥の住む町になってほしいものです。毎年探鳥会を企画している角田さんも「自分が歩けるうちは頑張る」と話していました。

粕谷和夫の観察日記

「めかい」とは、東京都の多摩丘陵地域で伝承されている里山（雑木林）の下層に自生する篠（アズマネザサ）の表皮を薄く剥がしたものを編み上げる「六つ目の籠」です。江戸時代から製作されてきたもので、2023年3月に東京都無形民俗文化財（民俗技術）に指定されました。先日、鳥仲間「めかい」作りに挑戦している方から「出来立てのめかい」を頂きました。早速居間のテーブルに置き、オカリナ、篠笛、眼鏡入れ等に使いだしました。



紅葉台新聞は、「高尾フモト同盟」のHPに公開されています。高尾の情報や働く人たちが紹介されています。興味を持った方は、覗いてみてください。また、皆様からの情報や投稿もお待ちしています。